さいたま市文化財時報

榧（かや）りぽーと

第31号

地方名望家（ちほうめいぼうか）と地域の記録　— 井原和一（いはらわいち）と日記「筆の跡（ふでのあと）」—

古来、人は公私の日々の出来事や感想などを記した「日記」という一種の記録をつけてきました。現在でも多くの人が日記をつけていると思います。こうした日記の中には、「ある時代」の「ある地域」の「ある歴史」の一断面を窺（うかが）い知ることの出来る貴重な史料となっているものがあります。

さいたま市所在の指定文化財の中にも、史料として興味深い日記が３件(*1)あります。今回はその中で、旧与野町（現中央区）の地方名望家(*2)、井原和一氏が書き残した近代の日記「筆の跡」に焦点を当てて、その特徴と内容の一部を紹介してみることにします。

＊１：①「浄国寺日鑑」（県指定）、②「児玉南柯日記」（県指定）、③「井原和一日記 — 筆の跡 —」（市指定）
＊２：明治時代以降、一定の資産や教養を持ち、さらに人望を集め地域の近代化や振興などに指導的役割を果たした階層や人物

日記の概要と井原和一

「井原和一日記 — 筆の跡 —」（32冊）は、与野町農会長・埼玉県会議員・与野町長等を務めた井原和一（明治28～昭和37年・1895～1962）の日記で、昭和６年（1931）から22年（1947）までの公私の出来事を綴ったものです。与野町を中心に、北足立郡・埼玉県下の政治・経済・教育・文化・風俗等、多岐にわたる地域・分野・出来事が対象となっており、その内容の豊富さには目を見張るものがあります。

昭和62年にご遺族のご厚意により与野市に寄贈され『与野市史』の編さんに活用され、さらにその史料的価値の高さから市史別巻（５冊）として翻刻、刊行されました。その後、有識者から昭和史の史料として大変貴重であるとの指摘を受け、平成７年（1995）に市指定文化財となり、現在はさいたま市が保管しています。

井原和一日記（表紙）

壮年時の井原和一

井原和一（以下、和一と略す）は、北埼玉郡三俣（みつまた）村（現加須市）の網野家に生まれました。同家は素封家（そほうか）として知られ、父と長兄は三俣村長を務め、祖父は私立埼玉英和学校（現県立不動岡高校の前身）の創立に尽力しています。和一は早稲田大学を卒業後、大正７年（1918）から神戸で貿易業に従事していましたが、10年に与野町の井原貞亮（ていすけ）の長女きよの娘婿に迎えられ井原家を継ぐことなりました。井原家は与野では「北井原」と呼ばれ、江戸時代以来の旧家・豪農で、祖父弥四郎、父貞亮は町長を務め、昭和初期には井原家（南井原）、渡辺家（渡辺製糸社長）と共に与野町の“御三家”とも称された有数の地方名望家でした。ちなみに明治43年から昭和21年まで与野町長は、この三家から交替で輩出されています。

和一は結婚後、妻きよと東京に居住していましたが、祖父弥四郎の死去に伴い大正末年に与野に移り住み、いよいよ地元での活動を始めました。昭和２年の与野町

消防組頭を皮切りに、4年に与野町耕地整理組合評議員、与野町会議員、6年には与野町農会長に就任するなど、短期間のうちにその手腕を遺憾なく発揮し、その評価は高まる一方で、将来の地域の指導者としての地歩を固めていきました。和一は公職に就き、地域の発展に貢献することは、地方名望家の家に生まれ、その家を担う者の責務と考えていたようです。この考えは後に子供たち（長男弥一郎・県議会議員、三男勇・与野市長）に受け継がれていきます。

こうした状況下、和一は6年1月1日から日記をつけ始め、それは22年11月11日まで続きました。では、なぜ日記をつけ始めたのか、その理由を和一は「筆の跡」（以下、日記と略す。日記の読み下し文は、『与野市史別巻　井原和一日記』より引用）の1月1日の条に以下のように語っています。

年末多忙多忙と云ふので、兎角何事もやりっぱなしになるので、せめて本家帰りの未の歳だから、今年からでも永久に日記を記して、わが家の歴史とでもしなければ、只徒食して一生を終り、銃砲虫の様なものだ。人生は仕事を残すか、芸術を残すか、何か生きがいのあることを残したいが、夫れ程の持合せがない。大いに研究もしたいが、雑事も多い。此の多い雑事を切り抜けて勉強研究すればこそ、それが凡人を抜けて居ることなのだと思ふ。夫れには日記を書いて、日に三省する事が最も手近で、又確実である。此の為に日記帳による日記では御座なり、結局駄目になると思ふので、初めよりむつかしい日本紙による日記とする。

単なる個人の記録としてではなく、半ば公的な記録として自身がなした事柄や日々の出来事を後世に残すと共に、自戒のために日記をつけ始める決意を固めたことが窺えます。さらに、日記には関連する資料、統計、地図なども丹念に転写され、新聞の切抜きも貼り付けられており、実証的・客観的な手法で後世に郷土の歴史、日本の歴史を伝えようと努めていたことも判ります。時代の制約や和一の視点からという限界はありますが、昭和初期から終戦直後までの与野町や北足立郡域、埼玉県下の出来事や状況等を知ることのできる貴重な史料となっています。

日記の記事から

和一は公職に就き活発に活動を展開し始め、活動範囲は次第に与野町から北足立郡域、埼玉県下へと拡大して行きました。その間、与野町会議員（再選）、与野町耕地整理組合副組合長、北足立郡農会副会長等を務め町政、農政に貢献しました。さらに昭和15年には県会議員選挙に出馬、45歳の若さで見事当選し、以後22年まで7年余にわたり県会議員として県政に携わり、政治・経済・教育等の分野で活躍しました。また、太平洋戦争も激化した19年には衆望を担って与野町長（～21年）にも就任しました。その時の心境を和一は日記に、

戦時下の誠に重大なる責務であると共に、与野町をして模範町と為すの決意と努力を為し、将来の進展の第一歩としなければならない。（中略）非常の決意を以て町長を引き受くることとした。

と、その決意を述べています。戦時下の最も困難な時に県会議員・町長を兼務し、その重責を担ったのです。しかし、和一は弱音を吐かず、何とか局面を打開していこうと覚悟を決めていたことが窺われます。

さて、このように何事にも真摯な態度で、熱意を持って取り組んでいった和一の具体的な活動の様子を、日記の記事からいくつか紹介してみることにします。

1　〈政治〉「大埼玉市」の建設

和一が携わった政治活動は多々ありますが、その中でも重要なものの一つが昭和17～18年の「大埼玉市」建設構想があります。昭和初期から浦和・大宮・与野を主とした合併による県都建設は、地域発展のためにも必要と認識され積年の懸案事項でした。17年11月1日の条によると、和一が大津敏男埼玉県知事を訪ねた折、県下の教育が不充分である原因が多分に東京市に依存していることだと指摘し、県都強化の必要性を唱えたことにより、

余に浦和市、大宮市、与野町の合併する必要を説くから、それは与野町より主張しなければ困難な旨を云ふと、その通りであると申され一骨折りして見てくれないかと云ふ。余としては、来年与野町長が交代するのでそれからと思ったのであるが、目下地方事務所にて町村合併談を進行中にて、時期がよいと思ったので早速承知し、

和一は翌日、井原義助与野町長の同意を得、ついで浦和市選出の前代議士で有力者の高橋泰雄や高田源八の両者にも意見を問い、概ね賛成という感触を得ました。さらに大宮市会議長の鈴木清助、県会の重鎮・新藤元吉等にも会い協力を求め、同意を得て共に活動をすることになり、両者は大宮の取りまとめに動くことになりました。以後、和一は大津知事の意を受けて、3市町の合併による「大埼玉市」建設を目指して県会、大政翼

賛会などを主な舞台として積極的に活動し、さらに県や３市町の有力者と鋭意折衝、取りまとめに尽力しその実現に邁進しました。そのため新聞紙上にも取り上げられ、一時は合併、県都建設の気運は盛り上がりましたが、具体論ではまとまらず膠着状態に陥りました。やがて、戦局の悪化、大津知事の転出等も重なり、ついに大埼玉市建設構想は頓挫してしまいました。しかし、この構想は後の平成13年に「さいたま市」の誕生という形で結実しました。その時、尽力した人々の中に、和一の子・井原勇と新藤元吉の子・新藤享弘がいました。これも父子２代にわたる歴史の巡り合わせといえます。

２ 〈教育〉農民講道館の創立

和一（右から３人目）と家族

農民講道館全景

和一は教育の必要性を充分に認識していて、自分の子（三男一女）の教育のみならず、公教育の充実にも努めました。それは与野農学校（現県立与野高校の前身）の農商学校への改組、与野第一国民学校（現与野本町小学校の前身）の校舎建設等の尽力にも現れていますが、特筆すべきは農民講道館（後の県立与野農工高校、現いずみ高校の前身）の創立があります。県総務部長を務めた横尾惣三郎は、持論の自給自足をモットーとした農村の中堅指導者育成を図る農学校の創立を企図し、その開館地を与野でと模索していました。農会長として町農業の振興に努めていた和一は、先に知遇を得てその持論に共感し、町の世論をまとめあげ学校用地の提供（与野町・三橋村・両井原家）・斡旋、建設資金の支援等に尽力しました。その結果、昭和９年５月12日に与野町円阿弥の地に開館させることが出来たのです。開館式には後藤文夫農林大臣、立憲政友会の重鎮・床次竹次郎代議士、馬場瑛一勧銀総裁を始め、中央・県下の政財官界の有力者約400名が出席するという空前絶後の出来事になりました。和一は日記の５月12日の条に、その時の感慨を以下のように記しています。

与野町に現職の大臣の来たのは今回が初めてであると云ふ。終始援助し少く共土地の人々は自分の努力により出来たとまで思って居る位に骨を折った講道館に、斯く盛大なる式の挙行されたことは全く我ことのごとく喜ばしい。

農民講道館の教育方針と実践方法は、農村不況の問題解決にあえいでいた当時の指導者層の耳目を集め、国策とも合致したため以後各界の有力者が相次いで参観に訪れるようになり、与野に農民講道館あり、と全国に知られるようになりました。以後も和一は横尾の良き相談相手として講道館の運営に関与していきました。

なお、和一は生前に教育基金を与野市に寄付し、奨学金制度の設置を願い出ました。その遺志は没後の37年に、有用な人材の育成を図る目的で「井原氏奨学資金」として制度化され実現しました。

３ 〈趣味〉歴史研究・史跡調査

和一は公務多端の中でも時間を作っては、弓道、盆栽、旅行、歴史研究、史跡調査等の趣味に勤しんでいました。特に歴史研究・史跡調査には熱心で、埼玉県郷土研究会の会員となり、見学会や講演会にも積極的に参加していたようです。日記の昭和10年５月７日の条にも、その関連記事が載せられています。

亀在家八二一番・八一七番の附近で、稲荷社の東方、南北の道路切り取りの所に竪穴住居址を見附けた。そこから出たらしい附近を探して、弥生式土器の薄手の甕の破片を見付ける。櫛目もない。（中略）大戸字本村一五七番の傍りに貝塚ありとの岡田氏の言に畑の中に這れば、約三十坪程の区域一面に往古の貝殻あり。地勢上当然のこととは云へ、与野町の内に貝塚を発見したことは非常の喜びであり、十数年来初めて聞き又見たのである。その処に

井原和一日記
（昭和10年5月7日の本文と土器破片の図）

て一寸変わった石斧を発見する。扁平の海岸にある石質で、普通の青色の石とは異り水成岩の様である。

これは現中央区大戸の遺跡で竪穴住居跡と薄手の弥生土器を、また、一部が市指定史跡である大戸貝塚の辺りで、貝塚と石斧を発見したことになります。そして、自分なりに評価を下しており、素養の深さが窺われます。また、発見した土器３点と石斧を日記に寸法入りで図示しています。和一は戦後も与野町文化財保護委員、与野町文化観光施設調査会委員等を務め、研究の成果を「与野の歴史」「与野附近の歴史」としてまとめています。

公私いずれにせよ、誠実に物事にあたり、正義感に溢れ、必要あらば努力を惜しまず、郷土の発展に尽力したその姿は、戦前の地方名望家の一典型であり、日記「筆の跡」には、その生涯の最盛期の姿と共に地域の様相が色濃く映し出されており、史料としての価値を高めているといえます。このような日記が残されているということを知って頂くと共に、機会があればご一読頂ければ幸いです。

参考文献：『与野市文化財調査報告書　第20集』　『与野市史別巻　井原和一日記Ⅰ～Ⅴ』　『与野人物誌』
『岩槻市史　近世史料編Ⅰ　児玉南柯日記』　『岩槻市史　近世史料編Ⅱ　浄国寺日鑑 上・中・下』

TOPIC

●文化庁の助成事業「伝統文化こども教室」が実施されています。

この事業は「我が国において継承されてきたさまざまな伝統文化をこどもたちに体験・修得させ、次世代へ継承し発展させる」ことを目的としています。今年度も、市指定「深作ささら獅子舞」の保存会の皆さんが講師となって、春岡小学校の獅子舞クラブの子どもたちに太鼓や舞を指導しています。夏の祭礼や見沼区ふれあいフェア、子ども文化祭などで日頃の成果を披露しました。

▲子ども文化祭（プラザイースト）

お知らせ

市内各所において開催されるお祭などで、指定文化財が公開されますので、ぜひお出かけください。なお、天候などにより日程を変更することもありますので、詳しくはさいたま市のWebページをご覧いただくか、当課までお問合せください。

期　日	名　称	時　間	会　場	内　容　等
1月11日(日)	さいたま市消防出初式	10時～	岩槻文化公園（岩槻区村国229）	「木遣歌」とともに鳶組合が華麗なはしご乗りを披露します。
3月15日(日)	田島の獅子舞	16時～	田島氷川社（桜区田島4-12-1）	3頭からなる獅子舞が優美に舞います。春の大祭は多くの人で賑わいます。

◆文化財保護課からのお願い!!

文化財保護課では、市で所有・管理している指定史跡などを、定期的に整備（剪定・草刈）しているほか、月に１回以上巡回しています。しかし、残念なことに放置自転車や粗大ゴミが投棄されていたり、先日は、市指定「時の鐘」（岩槻区本町）の鐘楼に、心無い人たちの仕業により、十数枚の千社札が貼られてしまいました。せっかく、次世代へ守り遺していくために指定した貴重な文化財です。文化財保護課としては、文化財の大切さをさらに周知しなければと気持ちを新たにしましたが、皆さまにも先人からの尊い財産を大事にする心を忘れないでいただきたいと思います。

▲千社札が貼られた「時の鐘」鐘楼

さいたま市文化財時報
樋りぽーと　第31号
平成20年12月26日

《編集・発行》
さいたま市教育委員会 生涯学習部 文化財保護課
〒330-9588　さいたま市浦和区常盤6丁目4番4号
☎048-829-1723　FAX048-829-1989
http://www.city.saitama.jp/